アラモンゴベスクロイド

目次

丸　4
七三の男　24
行徳の月　31
先生　43
再会　53
馬風記　60
愚民啓蒙結社　84
来客歓待記　91
危機一髪！　血染めの南海から奇跡の生還を果たす　99

星霜　敦

どくろく顔首行堂南店　106
お金を拾った　124
頭脳集積都市の変容　129
大きいもの小さいもの　150
煙にまく　156

丸

私は丸が好き。

その完璧な対称と均衡を備えた峻厳な存在感、どこにも引っかかりのない、流れるような線と面。私はその優美な曲面をうっとりと眺め、指先でなぞり、夢心地になる。

「ああ、このなめらかさ、この感触、たまらない……」

丸に抱きつき、頬擦りをするうちに、私はたびたび理性を失う。

丸、丸、まる、まあぁ、アアァ……。

まったく素敵、イケテル、魅力的すぎて憎いやつである。

人間の顔も丸いのが好きだ。

三角や四角顔を突き出されると、その角で突かれそうな気がする。

丸い顔を見ると気持ちがふくよかになり、ゆったりとした安らぎを覚える。

もちろん私は、自分でもほれぼれするくらい完璧な丸顔だ。街を歩けば誰もが振り向き、賞賛の声を惜しまない。

「おお、なんと見事な顔立ちだ」

「ひとめぼれしそう」

「ステキ、きっと高貴な方ね」

しかし、世の中には丸を理解しない保守的な御仁も多いから、次のような声もある。

「まるで満月ね、笑っちゃうわ」

「あの人に近づいちゃだめ、洗脳されたら大変よ」

「丸気違い、とっとと消え失せろ」

先日も丸に乗って街を転がしていたとき、昔気質の老人が私を真っ赤な目でにらみつけて言った。

「あんなやつがいるから、世の中がどんどんおかしくなっていくんだ。何もかもが

丸丸丸……、いったい何なんだそれは、馬鹿もいいかげんにしろ。まったく女、子供まで洗脳して、どういうつもりなんだ、ペテン師野郎！」

いつものことなので、私は鼻にもかけない。優美な顔の曲面を左手でしきりにこすりながら、通りすぎるだけである。

真実を直視せず、丸をわかろうとしない人間がどんなに怒ろうと、知ったことではない。転がりだしたら止まらないのが丸である。

私は常々、世の中が丸く治まることを念じているが、そうはいかないこともある。

すがすがしい気持ちで一日を迎えるはずの朝、目玉焼きの形が崩れていると、すべてがだいなしになる。

私は丸顔を真っ赤にして妻を叱りとばす。

「この馬鹿、まぬけ、おたんこなす、とんま、ぬけ作、あほう、唐変木、デベソ、こんこんちき、はんぱ者、穀潰し、役立たず、三角、四角、五角、六角、七角、八角、九角、十角、十一角、十二角、十三角、じゅう、じゅうよんかく……」

「やめて！」妻は叫んだ。
性格の丸い妻は何度も謝るが、簡単には許さない。執拗に責めたて、こぶしを丸めて妻の頭を嫌というほど殴りつける。すると妻の頭にいくつかの丸い隆起物ができる。
私はそれを確認すると、落ち着きを取り戻し、妻に丸の重要性をかんで含むように説く。
「おまえの頭にできたコブはどんな形をしている」
「はい。丸く盛り上がっています」
「そうだろう。目玉焼きも同じだとあれほど言っているのに、今日の目玉焼きは丸い黄身の形が崩れていたじゃないか。僅かだからいいという問題ではない。おまえの頭に丸くないコブができたら、いったいどんな気持ちがする？　そういうことを、自分自身のこととしてちゃんと考えたことがあるのか。少しぐらいならいいだろうという考えを起こして、私の丸い気持ちを釘で引っかくようなことを繰り返し、そ

の結果傷ついた丸から不純物があふれ出して止まらなくなったらどうする。丸が割れた無惨な姿に心も痛めず、四角いサイコロでも転がるとか、四角い地球の周りを四角い月が回ってもいいなどと一瞬でも思ったから、その歪んだ心が目玉焼きに表れたのではないのか」
「丸の大切さは、コブの形と痛さが証明しています。私がまちがっていました。自分でも気づかないくらい少しずつ、丸の縁が削れて角が張っていたんです。コンパスで調べていればわかったと思うのですけど……」
「コンパスだって？　小賢しいことを言うな！　コンパスを使えと教えた覚えはない。そういうことではないと、何度言ったらわかるんだ。もう一つコブを作ってほしいのか」
「あなた、まちがえました。馬鹿なことを言って、ごめんなさい。丸は丸であり、それ以外の何物でもありません。知識のない者が余計なことを言って申し訳ありません。丸を侮辱するつもりはなかったんです。許してください」

妻がコブをさすりながら何度も謝るので、私の気持ちもいくぶん丸みを帯びてくる。

「何事も自分の体で知ることが大切なんだ。理屈だけで丸の真髄をつかめはしない。おまえも私の妻である以上、辛いこともあるだろうが耐えてくれ。求道者ゆえの厳しさをわかってほしいのだ」

「丸く尊敬していますわ」

「ありがとう。さすがわが妻、ものわかりが丸い」

「本当に丸くありがとうございました」

われわれの夫婦喧嘩はこのように、いつも丸く治まっている。

朝の食事が済むと、私は丸に乗って出社する。私は、丸いものを製造・販売する会社、丸球商事の代表取締役である。

おかげさまで景気はよい。午前九時になると同時に、待ちかまえていたように注文の電話が殺到する。

「丸いものを百個、今日中に宅急便で送ってくれ」

「丸を二ダース、小さくてもいいから高級なやつをたのむよ」

「丸くて大きいものを七個、大至急欲しいんです。送料はいくらでも払うから航空便で送ってください。至急です。ほんとに急いでるんです。大至急頼みます！」

「丸を三万一千五百二十三個、今週中に東京湾の木更津沖に投下しておいてください。いつもの手順でお願いしま〜す」

「特別かわいい丸を一個だけキープしておいてくれ。夕方取りにいくけど、転がして帰るから、包装はいらない。その分、安くしてくれないかなあ」

「丸くて重いものを九百五十個、それから、やや軽い丸を四百三十個、それから、つるつるのピカピカのやつ五万個ください」

といった具合である。

朝に注文が殺到するのは、皆さん、午前中に商品が売り切れることを知っているからだ。

私の経営方針は粗製乱造をしないこと。売れるとわかっていても、金のために丸の質を落とすようなことは決してしない。かたくなに伝統の品質を守っているからこそ、お客さまの支持が長年にわたって続ているのだ。

ところが、社員の中に、こうした当社の経営理念をわかっていない者がいた。革新者を忌み嫌う風潮が根強く残っている中で、社員の意識が統一されていなければ、組織は危機的状態に陥る。その日、わが社は創業以来の危機に直面したのである。

先週の金曜日、上半期の決算を終えたわが社は、下期に向かってさらに躍進を図るため、幹部の円卓会議を行った。その会議で、北関東支店長の角田が異様な提案をしたのがトラブルの発端であった。

「丸の品質が重要なことは重々承知しています。しかし、これだけ需要が拡大している中で、品不足状態がこれ以上続いては、わが社の信用にかかわります。もう二十一世紀ですから、丸に対する古い認識にこだわらず、新しい大胆な発想をとり入れ、取り組んでいくべきだと思います。

丸とは角張ったものの角を極限まで削って、角を目立たなくしたものですから、丸といえどもしょせんは無数の角の集まりです。当社の丸は、その無数の角を極限まで丸めて販売していますが、実際の問題として、無限をどこまでも追求しても切りがなく、限度があります。これくらいなら、まあいいだろうという境界線ですね。これを、まあ、ざっくばらんに言えば、多少緩くして、生産量を増やしてはどうかと思うのです。品質が重要とは言っても、バクテリアにわかるほどの角張りを許容したところで、人間の感覚では計り知れない領域の問題ですし、会社の信用が落ちることはないはずです」

すると北海道地区担当の亀之子までが、わかったようなことを言い出した。

「なるほど、地球だって月から見れば丸いけど、われわれにとっては凸凹だからなあ。でも、それはそれで丸く治まっているわけで、結局、丸というのは相対的なもので、誰にとってどの程度丸いかが重要になるんだよね。バクテリアやウイルスが凹凸を感じたところで、彼らはわれわれのお客さんではないし、気にすることはな

いかもね」

この意見に、角田はさらに調子づく。

「すべてのものには多少の誤差というか歪みがあります。完璧を求める姿勢は大切だけど、理想は理想として、実際はどんなものにもぎくしゃくした歪みがあって、その許容の範囲内で世界は成立しているんです。地球が完璧な丸だったら、海の水を貯める場所がなくなって困ります。かといって地球が四角だったら、角の縁から墜落するかもしれないし、もっと面倒なことがたくさん起きるのです。だから、多少の凸凹を許容して地球は丸いんだと、われわれ人間も、地球自身も、宇宙の法則そのものが認めているのです。そういう厳然たる事実を差し置いて、一介の企業人が丸の真髄を極めるなんて、理想としてはわかるけど、われわれには荷が重すぎますよ。いくら立派な理想でも、できないものはできないんです。これはどうしようもないんですよ」

角田はゴマを散らしたおむすびのような顔を回し、得意げに円卓上の顔を見回し

た。腹の中にためていたことを吐き出してすっきりした様子である。

関西地区担当の尾久理と営業統括本部長の左橋は、ポーカーフェイスを決め込んでいる。企画部の玉利は下を向いたまま、机の上に置いた両手を絡ませ、指をしきりに動かしている。形勢がはっきりするまで、自分の気持ちを見破られないように気を使っているらしい。

幹部の中で私にもっとも忠実な楕円専務さえ、若手の大胆な意見に気持ちが揺らいでいるように見える。楕円専務は私の方を上目遣いに何度も見る。

みんなが私の意見を待っていたが、私はしばらく口を開く気にもなれなかった。

沈黙が続く間、向こう正面の角田がじりじりした様子でこちらを見ていたが、私は無視して煙草に火をつけ、いつも携帯している透明の丸を右手の人差し指で弄んでいた。

（おまえなんか、私に意見するのは三十年早い）と言いたかったが、それも大人げないと思いとどまった。

「まあ、世の中にはいろいろな考え方があるけど、社内では一致団結していかないとね。難しい問題があるなあ……。社長、どうですか」
場の緊張を和らげようと、楕円専務が口を開く。
「角田君、きみには私の考えがまったくわかっていない。十年以上もわが社にいて、一体いままで何をやっていたんだ」
「お言葉ですが丸味社長、私は私なりにこの十三年間、丸の真髄を極めようと努力してきたつもりです。しかし、求めても求めても、丸には際限がない。人知の及ばない限界があると気がついたのです」
「甘いな。きみは勉強したつもりかもしれないが、本質を見る力が欠けている。だから、浅はかな知識ですぐに、人知の及ばないなどと考えてしまうのだ」
「いえ、そんなことは……」
「では、丸とはなんぞや。きみが素直に感じるところを説明してみろ」
角田は立ち上がり、顔を真っ赤にして、身ぶり手振りを交えながら丸の説明を始

めた。
「丸とはすなわち、丸いものであり、大きなものや小さなものがあります。丸という形は丸まった感じがするもので、一見すれば即座にわかります。それは曲線および曲面で表現され、しなやかな手触り、滑りのよい、つるつるした、柔和な形で、押せば転がるといった特徴をもちます。そのため一カ所に止めて置くのが難しく、紐で縛ろうにも、紐を掛ける場所がない。凹凸がないため使い勝手に不自由することもありますが、逆に指や手の平でなぞると気持ちがよいという利点もあります。それは角がすべてなめらかに削られているためですが、削り方が全方位に均等なことも肝要です。そして、丸とは……、有り体に言えばですね、それは、なんというか、なめらかで、こう、優美で、そして、つるつる艶やかで、それでいて、すっぽり納まるような手触りのよい、あの、ゴロゴロ転がって回転したりもするし、こう、コロリとして、何となく憎めない感じで、クルクル、コロッと、その、あの、マルマル、コロコロ、グルグル回って、回って、丸まるマル、コロコロ回って、丸丸丸

……」
「わかった、もうよい！」
私が制すると、角田は汗だくになって椅子に崩れ落ちた。
「わが社に十三年もいて、その程度の説明しかできんのか。もっと簡潔に、的確な言葉で、丸の本質を表現できなくては話にならん。次は亀之子君、きみが説明してみろ」
亀之子はふらふらと立ち上がり、中空に目を向けて、丸の説明を試みる。
「丸とは、すなわち、こう、全部が中心に向かって閉じ込もるように丸まっていて、ギュッと、この、内部にみんなが集まるものだから、外はつるんつるんになり、角がなくて、上下も縦横もないコロンとしたものになり、なんかこう、のっぺりとして、ボーとして、曲面がどこまでも続いて、一周するとまた戻ってくるから際限がなくて、印をつけないとどこがどこだかわからない。それで、さきほども言ってましたが、艶やかで、なめらかで、その、線とか面が一定の率で曲がっており、おもしろいような、かわいらしいような、慎ましい印象を感じさせる、なんとも言えない味のある形であり、クルクルと、コロコロと転がって、それで、なんというか、こう、あの、あああ……」
亀之子氏は突然、奇矯な叫び声を上げた。そして、自分の頭を力任せに何度も殴りながら、部屋を飛び出した。
「おい待て、どうした！」
みんなが呼び止めたが、とても制止できない勢いだった。
「自分の頭にできたコブを、やつがどう認識するかだな。コブの丸みを指先で確認して、それでも何も感じないようなら、やつはクビだ」
私は重苦しい雰囲気を振り払い、すぐに会議を進めようとしたが、左橋が突然立ち上がった。左橋は会議室の壁沿いに並んでいる丸の一つに飛び乗ると、丸の上で絶妙のバランスをとりながら意見を述べた。
彼はわが社でもっとも丸乗りがうまいから、私も一目置いている。

「亀之子君はわが社に入って以来、この十年間、丸一筋に努力してきた男です。彼から丸を取ったら何も残らないくらい、ひたむきなやつなんです。それを今回のことだけでクビにするのは、ちょっとかわいそうです」
「いくらまじめでも能力がなければしょうがない」
「亀之子君は最近、悩んでいたのです。一時のつまらぬ迷いですが、ああいう生真面目な性格だから、おっと……」
左橋は水平に広げた両腕を揺らし、丸上の足を小刻みに動かしながら、崩れかけたバランスを立て直す。
「何を悩んでいたのだ」
「くだらないことなのですが、おっととと……、親や親戚にいろいろ否定的なことを言われていたらしいです」
「どういうことだ」
左橋は一瞬ためらってから口を開いた。

「彼の話では……、親戚縁者が口々に、一生を棒に振るぞと忠告するそうです」
「丸に人生をかけるのは無意味だというのか……」
すると角田が横から口を出した。
「実は、ぼくも亀之子君と同じ境遇にあるんです」
続いて玉利がうわずった声を上げる。
「ぼくは、妻に離婚届を突きつけられて……」
二人の歪んだ顔はいまにも泣きそうに見える。
「きみはどう思う?」
左橋に声をかけると、彼は後方宙返りをして、丸から飛び降りた。
「たわごとでしょう」
私は頷き、悩める子羊たちを諭す。
「まだまだ甘いな。周りの者を説得できないのは、きみたちの心に迷いがあるからだよ。人生を棒に振ると言われたら、振った棒で丸を飛ばすのが人生だと言えばい

いじゃないか。この程度の論理を操作できなくて伝道者が務まると思っているのか。
丸が世界を制覇すれば、われわれは世界的な偉人になれる。ゴールはもう少しだというのに、家庭内のつまらぬいざこざで、この偉大な目的を見失ってどうする。丸が挫折して四角い世の中になったら、われわれの立場はどうなる？　存在意味を失い、ゴミのように扱われていいのか。わかっているだろ。ここまできたんだ。もう少しで、われわれの天下だよ。すばらしい世界が始まるんだよ。角田君、玉利君、わかっているだろう……。
すばらしいことが、たくさん待っているんだよ。すべてがきみたちの自由自在になる理想の世界――ユートピアはすぐそこにあるんだよ。わかっているはずじゃないか。いっしょにやっていこうよ。みんなで丸の世界を実現しようよ」
私の力強い言葉に、角田と玉利は圧倒され、うっとりと遠くを見る目つきになる。
もう一押しとみた。
「丸にあふれた理想郷を実現したとき、きみたち二人がいなかったら、どんなに寂

しいだろう。私にとって、かわいい部下を失うくらい辛いことはないんだよ。丸いと思ってかわいがっていた部下に、突然角で突かれたときの気持ちがわかるかい。いつも、どうすればきみたちが幸せになれるかと、そればかり考えていたのに、私の片思いだったんだね」と、私は涙を流す。
「社長、そんなことはありません。私がまちがっていました、許してください」
角田の目は潤んでいる。
「社長、そんなこと言わないで、最後まで、私を、見捨てないで、ください。私が……、愚かでした」と玉利が嗚咽の声を発する。
他の幹部たちがすかさず拍手をすると、二人は頭をテーブルに擦りつけ、一層激しく泣き始めた。
「いいんだ。わかってくれれば、過ちを責めはしない。これからは気持ちを入れ替えて、一層の努力を期待するよ」
罪と悔恨、罪を憎んで人を憎まない寛大な措置、賞賛の拍手……。

感動の嵐がわれわれを包み、全員が泣いた。

その夜、幹部を引き連れ、巨大な丸に乗って街へ繰り出した。

街では無数の丸がぶつかり合いながら転がっていた。色とりどりのネオンの光が、丸の艶やかな曲面を照らし出して、ぴかぴかと輝いている。美しさに魅せられたのか、赤いシャツの若者が、転がる丸に飛び乗ろうとして滑り落ち、後頭部を路面に打ちつけていた。

オフィスビルより大きな丸が電信柱をなぎ倒しながら、大通りの真ん中を転がっていく光景にも、豪快な風情が感じられた。

まったく、すばらしい夜だった。

われわれは新たな丸への希望に目を輝かせ、晴れやかな気分で酒を飲んだ。時が過ぎるのも忘れ、翌朝東の空から光輝く丸が昇るまで、丸について語り明かした。

七三の男

その男に気づいたのは通勤途中だった。地下通路の中を歩いていた。男はすぐ隣にいた。

鼠色の背広に白いワイシャツ。紺のネクタイ。黒縁のメガネ。神経質そうな細い鼻。中背に白っぽい肌。髪は一本の乱れもない。

若いようにも、ものすごく年寄りのようにもみえる。人間なのか。ビー玉が喉につかえてしまったような違和感を感じた。

以来、髪を七三にぴたりと分けたその男が、やたら目につくようになった。

ホームで三列に並び電車を待っていた。ふと後を見ると、七三の男が立っていた。

売店で新聞を買おうと小銭をまさぐっていると、週刊誌を買った彼が擦り抜けて行った。地上へ向かうエスカレーターに乗っていると、横の階段を駆け足で下りて行った。

飲み会で、帰宅が終電間際になった日。ホームをよろよろ歩く彼を見て、酔いが一気に醒めた。

私は千葉県から地下鉄東西線を使って、半蔵門線の神保町まで通っている。恐らく七三の男も同じ電車で同じ街へ通っているから、よく会うのだろうが、気味が悪いので電車の車両を変えることにした。

後から四両目は止めて、先頭車両のいちばん前の扉から乗ることにした。歩く距離がずいぶん長くなったが、おかげで三日間は、あの男を見ることなく平和に過ごせた。

私はある雑誌編集社で、駆出しの編集者として働いている。いまのところ私のサラリーマン生活はまずまず順調である。

四日目の朝、駅の構内で便意をもよおし、トイレに駆け込むと、あいにくふさがっていた。足踏みしながら待っていると、右手の扉が開いた。七三の男が「失礼」と言う。顔から血の気が引いた。

季節が過ぎ、みるみる寒くなった。地下から出口を見上げると、四角く区切られた空がわずかに顔を出していた。

この頃は毎日、どこにでも七三の男は現われた。つけられているのかと思い、何度も振り向いてみたが、そんな様子はない。そこら中に男が散らばっていた。

まだ見習いなので、カメラや資料の詰まった鞄を持って出歩くことが多い。地下鉄をよく利用する。肩にくい込む鞄を背負って、長い階段を登り下りする。へこたれるものかとがんばっている。

編集長にやたらと怒鳴られるのは、あの人にストレスがたまっているせいだ。何事も忍耐。私が東京でがんばっていれば、田舎の母さんも喜んでくれるだろう。七三の男だけが気懸かりだ。

地下鉄の窓をふと見たとき、すぐ後ろに七三の男を発見した。目が合った時、ニヤッと笑った。

駅の構内に一歩踏み込んだら、もう一瞬の油断も許されない。そこら中にいる人

間の顔をすべて、点検することにした。そのうち人の顔を確認しないと気がすまなくなった。

見ても見ても、新しい顔が現われた。湧き出るように人間が出現する。見れば見るほど、変な顔ばかりだ。うんざりするが、やめられない。改札口を通るときも、駅員の顔を必ずにらんだ。

朝夕のラッシュ時は顔の集団が洪水のように向かってくる。全員を確認するため、ものすごい速さで目を動かした。

七三の男がそ知らぬ顔で歩いている。平凡な服装ですまし顔で歩いていても、その影が百メートル先をよぎるだけでピンときた。その感度は日に日に高まった。

今朝も見た。磨ぎ澄まされた目で見ると、その歩き方は他の人間と明らかに違っている。手足の動きが大げさでぎこちなく、機械のようだった。みんなはなぜ、この違いに気づかないのか。

七三の男は、ほとんどこちらを見なかった。いつも中空を見ているが、私が見て

いないときは、どうだかわからない。近づいてみると、肌はのっぺりとして、つるつるである。

冬になった。安アパートで迎える冬は、骨の髄まで冷え込む。毎朝七時半に、白い息を吐きながら駅まで歩いた。通り沿いに点々と、樹木が並んでいた。痩せ細った手を乾いた空に差し伸べ、泣いているようだ。

コートの衿を立て、樹を見ないようにして急いだ。歩きながら「虎とライオンはどちらが強いか、大きいものと小さいものとは？」と考えた。

都心に入ると、ビルが覆いかぶさってくるように感じた。そこで視線を前方の地面に据えるようにした。そうやって歩いていたとき、首筋の辺りに視線を感じた。次の瞬間、体が回転した。真っ赤な唇の女がいきなり目の前に現われた。女は「キャ！」といって、飛び出そうな目玉で私を見た。目玉に浮き出た赤い血管の一筋一筋まで、はっきり見た。

寒い夜、蒲団の中で丸くなり、じっと耳を澄ましていた。アパートの八百メート

ル上空で唸っていた風が吹き下りてきて、サッシのすき間から入ってくるのがわかった。
地下鉄のレール上を歩いていた。靴音が、一足ごとにトンネル内に響きわたった。水滴が一定の間隔で落ちる音も聞こえていた。
前方から何か近づいてくる。軍隊の行進のようだ。足音は次第に大きくなり、先頭の男が闇の中から姿を現した。
七三の男だった。二番目も七三の男。三番目も四番目も、みんな七三の男。七三の男が整然と列を作って、行進していった。列の後方へ行ってみると、壁の黒い穴から、七三の男が次々と出てきて行進に加わっているのだった。彼らが歩くたびに、手足の間接がカチャ、カチャと鳴った。
弾かれたように起き上がった。目覚まし時計の秒針に目を凝らす。カチ、カチという音がやたらに大きく聞こえだした。
立ち上がり、玄関口に向かった。左目の端にちらっと何かが見えた。全身の毛穴

が開いた。
鏡の中に七三の男がいた。